

第6回

帝国主義の時代

監修・講師 松沢裕作

学習のねらい

19世紀の末世界は、イギリス、フランス、ロシアなど一部の列強によって植民地として分割される新しい段階に入った。これが帝国主義の時代である。そして、帝国主義の波は東アジアにも及ぶ。そのきっかけとなったのは日清戦争であり、その結果が日露戦争であった。帝国主義の特徴と、その東アジアへの波及の経緯を理解したい。

keyword

● 帝国主義と植民地

プランテーション／アフリカ分割

● 日清戦争と東アジア国際関係の変容

華夷秩序の解体・日清戦争／大韓帝国

● 帝国主義諸国の競合と国際関係

日英同盟／義和団戦争／日露戦争

帝国主義と植民地

欧米諸国での資本主義の発展は、それらの国々にとって、新たな原材料供給地の必要性や、製品を売る市場の必要が増した。その結果、各国は競って植民地の獲得に乗り出し、アジア、アフリカの広大な地域が一部の列強の支配下におかれた。こうした動きを帝国主義と呼ぶ。

とりわけアフリカでは、19世紀の後半に植民地化が進行し、ほぼ全域が隙間なく列強の植民地となった（アフリカ分割）

植民地では、鉄道建設や鉱山開発、プランテーションの開発などが行われたが、これによって、現地の経済のあり方が帝国主義国の利益に沿ってつくり変えられることになった。開発されたプランテーションでは、帝国主義国が必要とする農作物の栽培が行われるようになり、伝統的な農業のあり方は大きく変化させられることもあった。地域の経済のあり方が、帝国主義国の経済に組み込まれ、従属させられるようになったのである。

日清戦争と東アジア国際関係の変容

東アジアでは、日本が帝国主義国への道を歩み始める。そのきっかけとなったのが日清戦争であった。焦点となったのは朝鮮半島だった。それ以前の朝鮮は伝統的な華夷秩序（中国を文明の中心とし皇帝を世界唯一の支配者とみなす秩序観）にのっとり、清に朝貢する関係にあつ

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

た。国際関係の変化にともない、清はこの伝統的関係をテコに朝鮮への影響力拡大を図り、おなじく朝鮮に影響力を及ぼしたい日本との対立が深まった。1894年の甲午農民戦争をきっかけに、日清両国はついに戦争に突入、日本が勝利を取めた。その結果、日本は植民地として台湾・澎湖諸島を領有することになり、帝国主義国となったのである。

下関講和条約は、朝鮮の「独立」を条約上明記することによって、朝鮮が清の従属国ではないことを明確化した。朝鮮も国号を「大韓帝国」、君主の称号を「皇帝」と改めた。華夷秩序の世界観に基づけば、世界に「皇帝」は一人しかいないはずであるから、これは朝鮮が華夷秩序から離脱したことを宣言する意味があった。

帝国主義諸国の競合と国際関係

下関講和条約では遼東半島も割譲されることになっていたが、これはロシア、フランス、ドイツの三国の干渉によって清に返還された。これ以降、東アジアではロシアが存在感を増し、今度は日本とロシアが朝鮮半島での影響力をめぐる対立する状況が生まれた。イギリス、ドイツなど、他の列強も、相次いで清の領土の一部を支配下においていった。こうした東アジアでの列強の利権獲得競争は、世界的な列強の対立・競合の一部であった。

1899年、欧米の進出に反発する義和団という宗教的結社が蜂起すると、列強8か国は共同で出兵して鎮圧した。一方、ロシアは戦争終結後も満洲から撤退しなかった。ユーラシア各地で南下するロシアと対立関係にあったイギリスは警戒感を強め、同じく朝鮮半島をめぐる対立関係にあった日本と日英同盟を結び、ロシアに対抗しようとした。この対立は1904年、日露戦争を引き起こすこととなった。

“探究”してみよう！

- 世界各地のプランテーションで栽培されるようになった農作物を調べてみよう。それが現在もその地域で栽培されているかどうか、調べてみよう。
- 台湾で、日本はどのような政策を実行したか、調べてみよう。
- 世界各地での列強の行動や、その背景にある政策の動向が、東アジアでの行動とどのように関係しているか、考えてみよう。